

令和5年度 滋賀大学教育学部附属幼稚園 学校評価

1. 幼稚園の現況

(1) 園名 滋賀大学教育学部附属幼稚園

(2) 所在地 滋賀県大津市昭和町10-3

(3) 学級数・収容定員

3歳児 1学級 32名

4歳児 2学級 48名

5歳児 2学級 48名

(4) 園児数 3歳児 すみれ 32名

4歳児 さくら 21名 もも 20名

5歳児 あやめ 19名 きく 18名

計110名

(5) 教職員数 園長(併任)1名 副園長 1名

担任 5名

教諭(大学採用) 2名 (県教委派遣) 2名

任期付臨時講師 1名

(県教委派遣教諭2名が育休中につき代替臨時講師2名)

副担任 4名(5歳児担当1名、4歳児担当1名、3歳児担当3名)

養護教諭(県教委派遣)1名

用務員 1名

計13(15)名

2. 幼稚園の特色

- ・滋賀大学教育学部附属学校園に共通する教育理念としての「いまを生きる」という言葉に象徴されるように、校園で自らの問題意識と関心をもち、自らすすんで課題に取り組み、様々な困難を乗り越えながら最大限の自己実現を達成しようとする子どもの姿を大切にしている。
- ・市内最大級の園庭を有し、伸びやかに心と体を動かして遊ぶ子供たちの育成を目指している。
- ・たからのもりを象徴とする豊かな自然環境があり、季節による自然の移り変わりや生物との出会いに心を動かし、不思議・感動から探究につながる保育を推進している。
- ・一人一人の子供の主体を大切に、自己発揮できる環境を整えると共に、互いのよさを感じ合いながら生活する充実感につながる取組を推進している

3. 幼稚園の使命

滋賀大学教育学部附属幼稚園として

- (1) 幼稚園教育要領および教育理念{いまを生きる}に基づいた教育を実践する
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う
- (3) 本学学生の教育実習を受け入れ、その指導を行う
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する

4. 幼稚園の教育目標及び教育方針

(1) 教育目標

- 健康でたくましい子供
 - 豊かに感じ、表現する子供
 - よく考え、自分で行動する子供
 - 伝えあい、力を合わせる子供
- 3歳児・・・幼稚園に慣れ安心して過ごす
4歳児・・・ものや友達に興味をもち、かかわる
5歳児・・・仲間と共に協同的な関係を育む

(2) 教育方針

- ・幼児の主体的な学びを尊重しながら保育をすすめます。
- ・幼児の本来もっている力をはぐくみ、伸ばすことを大切にします。
- ・好きな遊びに思う存分取り組むことのできる環境を、幼児と共に創造します。
- ・幼稚園で安心して過ごすことができ、のびのびと自分を出せるように支えます。
- ・一人一人の発達や個性に応じたかかわりを基本に、互いに育ちあえる生活を目指します。

5. 幼稚園経営の重点

(1) 保育の質を向上するための保育実践研究の推進

研究テーマ「“いま”を生きる×“これから”を生き抜く力を育む保育」

～多様性を生かし共生を実現する保育の探求～

(2) 幼児ラボ(Labo.) 構想に基づく、自然環境と ICT・メディア機器を活用した子供の感性と探究心を育む保育の推進

(3) 開かれた教育課程と幼稚園経営・家庭との連携

(4) 教育実習の指導充実

6. 幼稚園経営の重点 具体的な取組と評価

(評価の基準) 自己評価:A 高いレベルで達成できた B 達成できた C 一部達成できなかった D ほとんど達成できなかった

関係者評価:「自己評価について」A 適切である B おおむね適切である C あまり適切でない D 適切でない E その他

(1) 保育の質を向上するための保育実践研究の推進

研究テーマ「“いま”を生きる×“これから”を生き抜く力を育む保育」～多様性を生かし共生を実現する保育の探求～

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
多様性と共生の視点から教師の働きかけを考える	幼稚園、子供の世界における多様性と共生について共通理解を図る。 園内研修における事例検討や研究会を通して教師の働きかけを確かめる。 大学教員と連携して学びを深める。	表層的な多様性だけでなく深層的な多様について理解することにより幼児の世界における多様と共生の理解が進んだ。 事例カードを作成・検討し教師の学びから働きかけについてまとめた。子供の心情によりそう、また、探究につながる働きかけを学んだ。 事例検討・公開研究会において新たな知見を得ることができた	よりいっそう幼児の主体を大切にしたい働きかけを意識した保育につながった。 教師の働きかけについては整理しきれない部分も多く、実践する中で子供の育ちにつながるものとして検証していく必要が見えた。	B	・多様性と共生といった今日的な課題に果敢に求め続けられる研究姿勢に感銘を受けている。 ・普段の遊び一つをとってもSDGs的な学びがあるように少し視点を変えてとらえ、視野を広く持つことで新たな展開が見えるのではないか。 ・時代に応じたテーマ設定である。幼児教育においては以前から大切にされているテーマなので発信することが幼児教育の理解につながる。 ・自ら考えて行動する姿が感じられる。	A	・研究を広く発信することで幼児教育の関心や理解につながることを期待したい。 ・人権教育の視点を幼児も教師も共に高めあいながら進んでいけることを期待する。 ・幼児の主体的な遊びや活動については理解できるが、多くの子に豊かな体験をさせるための発信や場面づくりをすることがあってもいい。

(2) 幼児ラボ(Labo.) 構想に基づく、自然環境と ICT・メディア機器を活用した子供の感性と探究心を育む保育の推進

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
<p>子供・保護者と共に作るビオトープの造設</p> <p>ICT・メディア機器を活用した保育実践の推進による感性と探究心を育む取組</p>	<p>子供の興味・関心を引き出しビオトープ造設に取り組む。</p> <p>保護者参画のもとビオトープ造設をすすめる。</p> <p>ICT・メディア機器を積極的に保育に取り入れ子供が自らの遊びに生かす。</p>	<p>4.5歳児にプレゼンを行い、穴掘り遊びと並行してビオトープ造設作業を進め子供たちの好きな場所になっている。また、2日間の土曜日午前作業を設定し延べ23名の保護者の協力を得た。幼稚園評価においても期待の高さが見られた。</p> <p>関係機関(草津市立水生植物公園)との連携につなげることができた。</p> <p>生物の生態観察、化石研究ごっこ、雪や氷の観察など電子顕微鏡やモニターを様々な遊びに生かした。また、映像によりコマ回しの技に関心をもち、試してみる子供が多くいた。</p>	<p>寄付金・助成金を活用してビオトープをつくる算段であったため着工が遅れた。また、そのことで生き物を放すことまで至っていない。</p> <p>動画視聴で興味をもつことができたが、すぐに知識を確かめることができるため使い方には配慮を要する。</p>	A	<p>・子供にとっての貴重な体験の場になりうる非常に良い取組だと感じる。</p> <p>・ビオトープ、コンポスト、栽培活動の可視化、また、多様な運動要素を取り入れた遊びなどリアルな学びの場の提供となり主体的対話的で深い学びにもつながる。</p> <p>・ICT についてはメリット、デメリットを職員間で共通理解しさらなる深化、発展を。</p> <p>・ICT が急速に広がる中であっても幼児にとっては実体験から学ぶことが必要で大切であるととらえる実践は大切、また新しい視点での取組も見られた。</p>	A	<p>・持続できる環境、体制作りを工夫する。</p> <p>・体験からの学びを充実させることに ICT をどう活用していくかという実践は今後の幼児教育にとって大きな意味をもつであろうと考える。教員にとってもイノベティブな取組や学びになることを期待している。</p> <p>・ビオトープについては安全対策も必要になってくるので考慮されたい。</p>

(3) 開かれた教育課程と幼稚園経営・家庭との連携

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
<p>通信・掲示物等により保育の様子を通して、願いやそのことによる子供の育ちを保護者に伝える</p> <p>育宝会と連携し、幼稚園教育への保護者参画意識を高めることにより園経営への理解と連携につなげる</p>	<p>読みやすく理解につながる通信記事の精選と工夫をすすめる。</p> <p>HP への展開を定期的に行う。</p> <p>育宝会サークルによる保育・行事協力による保育・行事協力の機会をつくる。</p>	<p>なかよしホールに掲示している各クラスの通信や掲示に関心をもって見ている保護者が多く見られ、改善がみられる。通信を通して園の教育への理解につながっていることが返信等から感じられる。</p> <p>HP への展開は定期的に行い更新を継続している。</p> <p>各サークルと連携して、発表の場を子供たちの生活にも取り入れ、生かすことができた。</p> <p>コロナ禍でできてなかった夏の集いをおやじサークルの協力により開催することができた。</p>	<p>HP への展開については保護者の反応や感想を得ることができていない。</p> <p>夏の集いをイベント開催したがコロナ禍以前に戻すことはしなかったこともあり、次年度以降の協議課題となった。</p> <p>通園方法の緩和、預かり保育の導入などの課題に向き合う必要を感じている。</p> <p>(短時間の預かりを一回行ったところ非常に好評であった)</p>	B	<p>・園教育の発信は以前からも課題として挙がっているため、今後も工夫しながら改善に向けて進めてもらいたい。</p> <p>・コロナ禍で対面でのいろいろなことが制限されていた中で発信に取り組まれてきたと思いますが、保護者の方にとっては不安も大きいと思われる。少しずつ元に戻されていることが安心につながっているのではないかと。</p> <p>・通信・掲示物については保護者への伝わりやすさからもよい取組である。</p> <p>・育宝会、サークルなどに協力的に参加すると園のことがわかる</p>	B	<p>・コロナ禍も明けたこともあり、感染症には注意をしながらも柔軟に取り組んでもらいたい。</p> <p>・コロナ禍をあけて保護者と共に園の課題を共有してよい方向に進めていけることを願う。「子供真ん中社会」の実現のためにつながりを広げていくことも必要になってくると思う。</p> <p>・育宝会やサークルへの参加が活発になる手立てを考えることが大切。外部人材を積極的に活用することも園の魅力につながるのではないかと。</p>

(4) 教育実習の指導充実

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
教育実習による学びを より深める	<p>事前学習・実践の振り返り・事後のまとめについての指導を行う。</p> <p>実習の振り返りを学年単位で行う。</p> <p>振り返り時の意見交換を自身の実習にフィードバックできるようにする。</p> <p>主体的な実習となるように一人一人の理解に応じた指導を行う。</p>	<p>それぞれの指導については担当、担任、副園長で相互に連携して行うことができた。実習後のゼミとも連携し講話の機会を持つなど実習生の理解と学びにつながった。</p> <p>実習の振り返りを複数の実習生で行うことができるのは附属園ならではの学びである。また、実習生同士での学びあいが次の実習に活かされている場面も多く見られた。</p>	<p>遠方からの通勤や、体調不良時の対応など遅刻や欠席があったことは残念であった。</p> <p>実習生の資質にも差異があり、一人一人の力量に合わせた指導が難しいことがあった。</p>	B	<p>・コロナ禍前の実習指導に戻ったことは大変良かったと思う。</p> <p>・実習指導については先生方のご負担も大きいと思うが、附属幼稚園ならではのメリットでもあるので引き続き充実させてもらいたい。</p> <p>・附属幼稚園の取組を教育実習で学ぶことは貴重な機会。実習生の学びの場として頑張ってもらいたい。</p>	A	<p>・大学と学校園の物理的教理が離れていることのデメリットは大きく、交流の機会をもちにくい現状はあると思うが、幼児と触れ合うことで学生がさらに幼児教育に面白さを感じて学んでくれることを願っている。</p> <p>・実習生それぞれに合わせた指導は大変だと思うが、力量や熱意に合わせた指導により、先生になりたいという気持ちを高めてもらいたい。</p>